



羅針盤



塩原 哲夫
Tetsuo Shiohara

杏林大学医学部名誉教授, Visual Dermatology 編集委員

ようこそ紫斑ワールドへ

皮膚科医は皮疹を見るのが仕事である。皮膚科に入ってまず驚いたのは、先輩医師がいつも簡単に紅斑、紫斑を触ることもなく、まして硝子圧を用いることなく見分けることであった。しかも、チョイと触って、これは“浸潤を触れるね”などと訳の分からない日本語をつぶやくのである。“浸潤って?? 何?!”一体どうしたら、そんなに簡単に分かるのだろうか、と不思議に思ったものだ。皮膚科の系統講義など一回も聴いたことのない怠惰な学生であった筆者にとって、怠惰な自分でも皮膚科ならやっつけていけるだろうなどという思い上がった甘い考えは一瞬のうちに吹き飛び、皮膚科に入局したことを心から後悔した。

しかし、それから半年も経たないうちに、そんなことは誰でも毎日皮疹を見ていれば分かってくるのだということも理解した。まさに百聞は一見にしかずで、その頃かからいかにくり返し視ることが大事かを思い知るようになった。恐らく他科の医師にとっても、もっとも分かりにくいのがこの“紫斑”ではないかと思われる。同じ赤でも鮮紅色と紫斑がちょっと混じった紫紅色とでは、その差はいくら文章で説明しても分からないが、実際に紫斑をくり返して見ればすぐ分かるようになるのである。しかし、写真ではいくら高精細なものでも、なかなかその微妙な色調の差は分かりにくいのも事実である。とくに最近のデジタル写真では、なかなかこの細かな差異が出にくい。その点、本書では写真の美しさ、精細さでは群を抜く大原先生の手による写真(主に35ミリフィルムか

らなる)が多数用いられているため、市販のどの本より紫斑本来の微妙な差異を裸眼で診るのに近い感覚で見ることができるはずである。中には実際に(筆者の様な老眼の眼で)診るよりよほど実物に近い写真もある。

本特集号では通常の紫斑の特集と異なり、緊急性を重視した構成になっており、まずは危険な、すぐ対応すべき紫斑の臨床をしっかり頭に入れた(これさえ知っておけば危険な紫斑を見逃さずに済む)あと、覚えやすい特徴的な紫斑へと進み、あとは余裕を持って観察できる緊急性のない紫斑を学んでほしいと考えている。

紫斑は知れば知るほど、そして紫斑の色の差が分かれば分かるほど、皮膚の解剖や生理学、免疫学の知識を動員せざるを得なくなり、知らず知らずにその知識が身に付くのである。疑問を持って自ら学ぶ(人から教わった知識はすぐ忘れてしまい余り役に立たない)ことが何より大切な医師にとって、紫斑は格好の題材と言えよう。出血している血管の深さや出血の程度、出血からの時間的経過など、紫斑を丁寧に見ることにより、出血の経時的な変化をまるで物語を語るごとく説明できるようになるのである。紫斑を見たら、これはどの部位の血管から出血したのだろうか、なぜ出血したのだろうか、なぜこの部位にのみ出血したのだろうか、という疑問が次々に浮かんできたらもうしめたものだ。あなたはもうすっかり奥深い“紫斑ワールド”に入ってしまったと言える。そしてこの世界はいったん入ったら最後、どんどん深化していく不思議な世界なのである。